和歌と俳句の文章構造

――文章論的考察の試み――

樺島忠夫

一、問題の所在

言語活動時の諸条件と文章構造との間には対応関係の存在が予想されるが、この対応関係を把握することが文章論の課題の一つとしてとりあげられる。

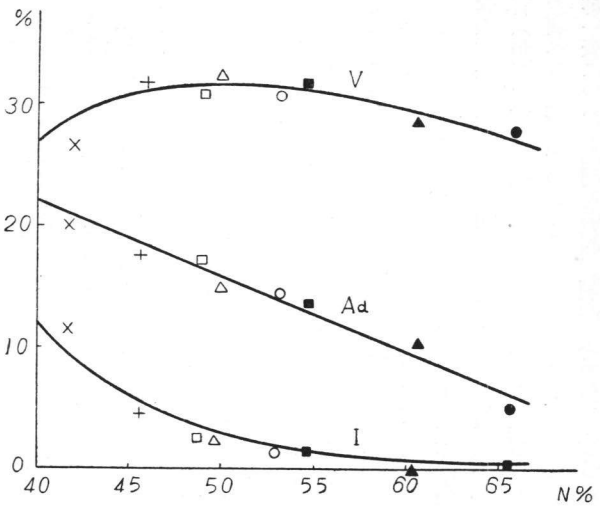
和歌と俳句とに働く条件の一つとして音節数の制約がある。これについては既に波多野博士の研究があり、波多野博士は和歌三十一、俳句十七という音節数の制約の差によって、品詞の比率（特に動詞）に差が見られ、これによって両者の表現効果が異ってくるとされた。(1)

文章に加わる量的な制約によって品詞の比率が異なってくる事は実験的にたしかめることができる。(2) 和歌と俳句の品詞の比率を調べるために角川書店昭和文学全集「昭和短歌昭和俳句集」を調査対象とし、和歌俳句ともに夫々一人一首(句)、計夫々百十八首（句）を無作為抽出して品詞（但し助詞助動詞は除く）毎の数を調べると第一表のようになる。

第一表について品詞を名詞、動詞、その他の三つに区分して和歌、俳句の母集団比率の間に差があるかを検定すると、カイ自乗六・六五、自由度二で有意の差がみられる。以上のように和歌と俳句の間には品詞の比率に差が見られるが、これを他の文章と比較すると第一図のようになる。第一図は異なる条件のもとにあると思われる文章をとって、部類別けした品詞の百分率を名詞百分率を基準として表わしたもので、Nは名詞の、Vは動詞の、Adは形容詞、形容動詞、副詞、連体詞を合併したものの、Iは感動詞接続詞を合併したものの百分率を示す。（詳しくは(2)参照）×は

	和歌	俳句
名詞	587	354
動詞	342	173
形容詞	82	32
副詞	41	21
形容動詞	22	8
連体詞	3	0
感動詞	2	0
接続詞	0	0
計	1079	588

第一表



第　一　図

日常会話、＋は小説会話、□は哲学書、△は小説地の文、○は自然科学書、■は和歌、▲は俳句、●は新聞記事の品詞百分率を示す。曲線は最小二乗法によってあてはめたものである。図によって見られるように名詞百分率によって他の品詞の比率がほぼ一義的に定まるが、和歌、俳句、新聞記事のように文章に量的な制約が加わるものの名詞百分率が高いことからも、文章に加わる量的な制約と品詞比率との相関関係を認めてよいであろう。

しかし、文章構造と条件との対応は必ずしも一次元的にはとらえられず、一般に文章は数個の条件をふまえているので観察の面においても幾つかの方向から綜合的になさねばならない。即ち第一図から自然科学書の文章、和歌、俳句、新聞記事という系列をとってみる。後の三者には文章の量的制約が加わり、これに対応する文章構造上の変化は品詞の比率によってとらえられた。所が他の条件を考えてみると、自然科学書の文章及び新聞記事には対象を論理的に記述し、和歌俳句には情緒的表現を目的とする表現価値の相違がある。従って同じく文章に量的な制約が加わっても和歌、俳句と新聞記事とでは、その制約のもとでの文章構成法に違いが予想される。この事から論理的表現価値×文章の量的制約という条件と、情緒的表現価値×文章の量的制約という条件の差に対応する文章構造の差を自然科学書、新聞記事と和歌、俳句との文章構造上の差にもとめる。そして、和歌及び俳句の文章構造の夫々が、自然科学書、新聞記事の文章構造からどれ位離れているかという離れ具合の差を求める事によって和歌と俳句の文章構造の差を品詞比率以外の面にもとめようとするのが以下の目的である。

二、分析に必要な概念の準備

まず、限られた大きさの言葉の集合で表現対象を表現するにはいかなる方法があるかを考えてみると、一般に次のような場合が考えられる。

(a)　部分に関する細かな表現を省略して骨組みだけを示す（骨組み的表現）

これは新聞記事に見られる文章などで、論理的な性格を重視するものと言える。

(b) 表現しなくとも理解しうる項を省略（詞的省略）

「あんなに言ってやったのに、聞かないからそんな怪我をするのだ」を「あんなに言ってやったのに……」であらわすような場合

(c) 関係を表わすに必要なことばを省略（辞的省略）

「奈良七重七堂伽藍八重桜」のような例。

限られた大きさの言葉で大きな表現対象を表わそうとすれば以上のどれか、又は幾つかの併用となる。こゝで(a)は(b)(c)に対して「要約」と名づけ、(b)(c)は(a)に対して「省略」とよぶ事が出来よう。しかし実際には要約と省略とは同時に行われるので、このような概念で実際の文章を分類するのは不完全である。従って、これを変形して次のように二つに分類する。

例えば（a）の場合は、表現された文章又は文は要素間の関係が明らかにされていて、この文章を理解するために他のことばや知識を補う必要はない。このような場合、文章自体が閉じた体系を作っているという意味でこのような文章を閉表現と呼ぶことにする。

(イ)三日午後十時ごろ○○電車△△駅東方○○川鉄橋で大阪行急行に四十才ぐらいの和服姿の男が飛び込み即死した。

(ロ)A「へえ、旦那……」

B「ありがとう」

A「どうぞ」

C「あゝありがとう」

（三尾砂・国語法文章論より借用の例）

(イ)はそれだけで理解可能であるから閉表現である。(ロ)はこれだけでは何の事かよくわからず不安定な感じがするから閉表現ではない。この(ロ)や（b）の例のように聞き手の側で場面や既知の知識を補う事によって意味が完全になる文章を開表現とよぶ。(ロ)に表現以外の要素をつけ加えると次のようになる。

寅吉（銚子をうけとって新三郎に）「へえ旦那……」

新三郎「ありがとう」（さかずきを出す）

寅吉（しゃくをする――自分のさかずきをあけて治兵衛にさす）「どうぞ」

治兵衛「あゝありがとう」（うけとる）

（万太郎「不幸」）

これで安定した感じになる。このように開表現に他の要素を補って閉表現にすることを閉被をとるという事にする。

以上である表現について、それが開表現か閉表現かの区別がつく事になる。次に以下の事を規定する。n個及びm個の要素からなる文章を $A=\{a_1, a_2, \cdots\cdots, a_n\}$, $B=\{b_1, b_2 \cdots\cdots b_m\}$ とする。夫々の要素について開表現か閉表現かの区別をつける。Aに属する開表現の要素の数を O_A、Bに属する開表現の要素の数を O_B であらわし、

$O_A/_n \vee O_B/_m$

である場合に、AはBより粗い表現、逆にBはAより細かい表現とよぶ事にする。新聞記事はどこで、だれが、いつ、なにを……という事を厳密に組立てなければならない論理的な性格上、閉表現が殆んどである。しかし和歌、俳句は論理的性格は二次的であ

り、限られた音節数の中で情緒の表現、特に余情を出さねばならない。したがって和歌、俳句には開表現が多く、新聞記事やまた自然科学書より粗い表現になることが予想される。この粗さの度合を求める事によって和歌と俳句の文章構造の差を求める事が出来よう。

三、分　析

そこで、和歌、俳句には開表現としてどのようなものがあるかを求めなければならないが、まず考えられるのは詞的省略である。詞的省略という点で最も重要なものは文のまとめをなす部分（述語）の省略である。関係の論理的表現であれば文のまとめをなす述語の役割は欠く事が出来ないが、和歌、俳句においては、感動の中心が述語にかゝる修飾語などのような要素に向けられ、述語そのものは副次的な機能をもつにすぎない場合がある。従って文が連用どめになったり、述語をことばとしてあらわさない事がある。例をあげると次のようなものである。

海に向く窓より海はみえなくに凭の上にひくき岬山
冬の月青みわたりて照りたれば山の枯木も遠からなくに
兄いもといつも一緒に枯芝に
一行に別れ釧路の秋を見に

次に開表現としてとりあげるべき辞的省略として要素の切断がある。その説明として内田百閒氏の「『長作我輩は猫である』の例を示そう。独逸語教師五沙彌と長い顔をした、昔の学生出田との対話の場面である。

「出田のフアウストは珍怪の極みだったね。ガウンの様な物を著てさ、頻りに袖ばかり振って、頷巾振る山のフアウストみたいだったぜ。いやに長い顔をしてさ」
「長い顔って、僕ですか」
「さうさ」
「をかしいな。あんまり困ったので、顔が長くなったのかな」
「フアウストの台詞よりは長かった」
「そんな筈はないな」
「今だって長いぢゃないか」
「長かありませんよ」
「自分の顔は見えにくいからね。顔が長くなれば自然目は上の方へ上がる」
「無茶だよ、先生の云ふ事は」
「目がもとの儘の位置にとゞまって、上の方だけ伸びたらをかしいぜ」
「それぢゃ、どうなるのです」
「大体、顔が長いと云ふのは、真中辺りから下の方が伸びてゐるのだ。成島柳北が墨堤へお花見に行ったさうだ」……A
「墨堤って何です」
「隅田川の土手だよ。福地桜痴などと一緒に馬に乗って行ったんだ」
「成島柳北を先生は知ってるんですか」
「馬鹿な事を云いなさんな。僕が生まれて来る何年も前に死んでゐる。人をあんまり、ぢゞいの様に考えるものではな

い」

「はい。それで、どう云ふ事になるのです。何の話を我々は聞きつゝあるか」

「だからさ、成島柳北がお花見に行ったんだよ、馬に乗って」

「隅田川でせう」

「世はさかさまと成りにけり、と云ふのがその時の歌なんだ。きっと福地桜痴が作ったんだね」

「どう云ふ意味なのです」

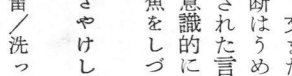
「乗りたる人より馬は丸顔」

「だれが乗ったのです」

「成島柳北さ」

「あっ、さうか。何だ、まだ顔の長い話ですか」……B

以上の例を一つの文章とすると、これは二つの部分に分けられる。即ちAと記した所の「真中辺りから下の方が伸びてゐるのだ」までが一つと、「成島柳北がお花見に行ったさうだ」以下が一つである。前の部分の主題は「顔が長い話」で、後の部分の主題「成島柳北のお花見」との間に見かけ上は話題の切断がある。この主題の突然の切断によって聞き手（出田）は混乱させられて「何の話を我々は聞きつゝあるか」と言っている。しかし、話手の側では、前の話題と後の話題との間には関係がつけられているのであって、両者ともに顔の長い話を主題としている。Bにいたって聞き手もそれを知り「何だ、まだ顔の長い話ですか」といっている。この間の過程を示すと第二図のようになる。即ち以上の文章は話し手の側では一つの閉表現であるが受取り手には二つの独立した閉表現として受取れる。しかし、受取り手には、こゝでは前の部分と後の部分とが連続したものであるべきだという連続の意識があり、その接続関係を見出だそうとあせっている。つまり、受取り手は前後をあわせて一つの開表現とし、閉被をとる努力を行っている。



第二図

以上のように、文または文章の中に切断があり、しかも受取り手の側にその切断はうめられるべきものだという連続の意識がある場合は、使用された言葉の綜合以上の効果が得られるが、和歌俳句ではこれを意識的に利用している。

A冬の夜に干魚をしづかにほぐすなり／甘き日はしばし吾にこざらむ

白樺の木肌さやけし／とこしへに吾がめあはざらむ処女思ほゆ

どこかで春雷／洗っても鉄工の手

恋猫が屋根にゐる／ピアノを叩く

以上の例は意味上の切断があり、閉被は受取り手にゆだねる。また意味的には連続であるが、

B秋の日に耀いて咲く蓮の花／この一花に命を寄する

冬の夜や／湯槽のすみに子を洗ふ

のように、格関係において不連続なものがある。そこで意味中心に考えて、Aのような例を併立で不連続、Bのような例を併立で連続とする。

	連用どめ又は述語の省略	左以外	計
和歌	3	115	118
俳句	17	101	118

第二表(A)　$X^2=9.23$ (Yates の修正による)

	併立で不連続	併立で連続	少くとも一つは左の一つを有するもの	有しないもの	計
和歌	21	13	34	84	118
俳句	27	32	55	63	118

第二表(B)　$X_2=7.96$

	開表現	閉表現	計
和歌	36	82	118
俳句	61	57	118

第三表　$X^2=10.94$

開表現となるものを以上のものとし、先に抽出した標本について、連用どめ又は述語が省略されたものの数(A)、及び併立で不連続、併立で連続なものの数(B)を調べると第二表のようになり、夫々、和歌と俳句の母集団比率には有意の差がみられる。次に、以上の要素の切断と省略とを、少くとも一つは有するもの(開表現)とそうでないもの(閉表現)との数を調べると第三表のようになり、有意の差がある。従って集団としてみた場合、俳句の表現は和歌の表現より粗い表現であることがわかる。なお新聞記事には述語を名詞止めにしたもの(これは閉表現と認められる)以外に、和歌、俳句に見られるような開表現は殆んど見られない。従って

○論理的表現価値×文章の量的制約→細かい表現×品詞の比率の変化(名詞の増加)

○情緒的表現価値×文章の量的制約→粗い表現×品詞の比率の変化(名詞の増加)

という条件と文章構造との対応が見られ、特に、和歌と俳句においては、

情緒的表現×文章の量的制約(和歌三十一音節、俳句十七音節)

という条件に対応して

和歌が俳句より名詞比率小×和歌が俳句より細かい表現

という文章構造が見られるのである。

和歌が情緒的流動的であり、俳句が空間的瞬間的で極度に圧縮された情感をもつといわれるのも、品詞の比率と表現の粗さの二つの面から考えなければならぬであろう。

(註)(1)波多野完治「和歌と俳句」(文章心理学入門)

(2)「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」樺島(国語学第十八輯)

—大阪府立北野高教諭—